

唯能常称章(三帖第六通)

それ、南無阿弥陀仏と申すは、いかなるころぞなれば、まず、
南無という二字は、帰命と発願回向とのふたつのころなり、また
南無というは願なり、阿弥陀仏というは行なり、されば、
雑行雑善をなげすて、専修専念に弥陀如来をたのみたてまつ
りて、たすけたまえとおもう帰命の一念おこるとき、かたじけなく
も遍照の光明を放ちて、行者を攝取したまうなり、このころす
なわち、阿弥陀仏の四つの字のころなり、また、発願回向のこ
ころなり、これによりて、南無阿弥陀仏という六字は、ひとえにわ
れらが往生すべき、他力信心のいわれをあらわしたまえる御名
なりとみえたり、このゆえに願成就の文には、聞其名号

信心しんじん歡喜かんぎと詭とかれたり、この文もんのこころは、その名号みょうごうをききて
信心しんじん歡喜かんぎすといえり、その名号みょうごうをきくといふは、ただおおようにき
くにあらず、善知識ぜんぢしきにあいて、南無阿彌陀仏なむあみだぶつの六つの字のいわれ
を、よくききひらきぬれば、報土ほうどに往生おうじやうすべき、他力信心たうきしんじんの道理どうり
なりと、こころえられたり、かるがゆえに、信心しんじん歡喜かんぎといふは、すなわ
ち信心しんじん定さだまりぬれば、浄土じやうどの往生おうじやうは疑うたがなくおもつて、よるこぶ
こころなり、このゆえに、彌陀如来みだにょらいの、五劫ごこう兆載じやうさい永劫えいこの御苦勞ごくろうを
案あんずるにも、われらをやすくたすけたまうことの、ありがたさとうと
さをおもえば、なかなか申もうすもおろかなり、されば、和讚わざんにいわく、
南無阿彌陀仏なむあみだぶつの回向えこうの、恩徳おんとく広大くわいた不思議ふしぎにて、往相回向おうそうえこうの
利益りやくには、還相回向げんそうえこうに回入えにゅうせりといえるは、このこころなり、ま
た、正信偈しやうしんげにはす下に、唯能常称如来号ゆいのうじやうしやうにょらいごう、応報大悲弘誓恩おうほうだいひぐせいおん

とあれば、いよいよぎょうどうゆうやが行住坐臥どしよしよえん時処諸縁のをきらわず・ぶつとんほうじん仏恩報尽ののため、ただしょうみょうねんぶつ称名念仏すべきものなり、

あなかしこ　あなかしこ

(不読)

文明六年十月二十日これを書く

唯能常称章の大意

南無阿弥陀仏とはどういう意味かといえ、南無には帰命と発願回向との二つの意味があり、また南無には願、阿弥陀仏には行の意味があります。ですから、自力のはからいを捨

て、二心なく阿弥陀如来に帰命するそのときに、如来は光明を放って行者をおさめとってくださるのです。それが阿弥陀仏の意味であり、また発願回向の意味です。そこで阿弥陀仏という六字は、私たちが浄土に往生できる他力の信心のいわれをあらわした、み仏の名前であるとわかるのです。

それを『大経』の願成就の文には、「聞其名号信心歡喜」と説かれています。「聞其名号」というのは、ただおおまかに聞くのではなく、善知識にあつて南無阿弥陀仏の六字のいわれをよく聞くことであり、そうすれば、浄土に往生することができるのが他力の信心の道理であります。「信心歡喜」とは、信心決定して往生疑いなしと喜ぶ心です。

阿弥陀如来のご苦勞は言葉にあらわすこともできないほど

尊いものです。親鸞聖人は、和讃に、南無阿弥陀仏の恩徳の
深さをお示しになっており、また『正信偈』にも、「唯能常称如
来号 応報大悲弘誓恩」とあります。ですから、いつでもでも、
仏恩報謝の念仏を申すべきであります。